

新型コロナウイルス感染症の拡大による行動制限が始まって早くも3年がたとうとしている。この社会や医療に対する大きな影響は今更述べるまでもないが、その中の一つにインターネットを介したさまざまな活動のリモートの併用や移行がある。

行動制限の初期は学会や研修会が実質上中止になったことも多かったが、リモート技術で代替できることが知られると、比較的短期間で当然のように取り入れられるようになった。言うまでもなくリモートのよい点は、インターネット環境が十分であれば全国各地、あるいは海外からでも参加でき、コミュニケーションがとれることである。特に講義形式の一方方向性のものについては、会場までの移動の時間や費用を節約できるという利点もある。

また、グループ討論などもお互いの顔を見ながら行うことも通例となってきた。さらに、各学会や協会の役員、委員会活動などは、リモートで行う方が予定を合わせやすい。最近、1日でいくつものウェブ会議に参加することも珍しくなくなってきている。

これらを主催する側に立つと、規模が大きく会場数が同時に多数となっており、アクセス管理が厳格に行われるべき学会のようなものでは、相応の費用がかかることになるが専門業者に頼まざるを得ない。ごく小規模なものでは自施設の人員を動員して行うが、質疑やアンケートなど双方向性を付加していけばいくほど複雑になり、機器や人員の追加や経験、

技術、手間が必要となる。2022年4月に始まった特定機能病院リハビリテーション病棟の要件の1つとして、「月に1回以上地域においてリハビリテーションに関する研修を行う体制をとっていること」というものがあり、実際に研修会を行っているが、特に新型コロナウイルスの感染者が増えている状況ではリモート開催は有効な手段であり、それまでに手探りで研修会や講演会を開催してきた経験を活かすことができた。

当院は新型コロナウイルス感染症が広まり始めてから

は、出張規制が厳しく、実際に学会に現地参加できるようになったのは後になってからであったが、現地参加のよさを実感している。現地参加ができない欠点、できる利点がたくさんあることは言うまでもないことで、人とのパーソナルなコミュニケーション、機器や道具の実物が見られること、体験できること、これにつ

巻頭言

リモート普及に思う



はなやま こうぞう
花山 耕三
当協会理事

(川崎医科大学附属病院 リハビリテーション科 部長 医師)

いてはかなり自粛しているが学会参加時間以外の楽しみなど、枚挙にいとまがない。

新型コロナウイルス感染症はやがて終息に向かうであろうが、今回のパンデミックを機会として普及したリモートによるコミュニケーションはなくなり、むしろ進化していくであろう。もちろん現地で顔を合わせることのよさが片隅に追いやられることもない。それぞれのよい点を活かした形に落ち着いていくことと思われる。